

## 日本アメリカ史学会 第15回(通算43回)年次大会 プログラム

日時： 2018年9月22日(土)、23日(日)

場所： 日本女子大学目白キャンパス 香雪館4階

〒112-8681 東京文京区目白台2-8-1

連絡先： 藤永康政 (fujinagay(a)fc.jwu.ac.jp)

### 大会第1日 9月22日(土)

幹事会 (香雪館304号教室) 12:00~13:00

シンポジウムA (香雪館401号教室) 13:30~17:00

「『トランプの時代』を歴史的に考える」

#### 【趣旨】

2016年11月の大統領選挙では多くの主流メディアの予測を裏切り、共和党のドナルド・トランプ候補が民主党のヒラリー・クリントン候補を破り、翌17年1月に第45代アメリカ合衆国大統領に就任した。トランプは出馬表明以来、メキシコ移民を「ドラッグと犯罪を持ち込むレイピスト」だと誹謗して米墨国境に「壁を建てる」と煽り、ムスリムをテロリストだと攻撃し、数々の性差別言動を繰り返した。そして過去の性暴力や性的嫌がらせを告発され、非難を浴びながらも大統領選を制した。トランプ政権は発足以来、TPPおよびパリ協定からの離脱、法人税の大幅減税、ダコタアクセスパイプラインの建設許可、特定国からの移民・難民の入国禁止、移民関税執行局(ICE)による書類不備移民の摘発・拘束・強制送還の強化、トランスジェンダーの米軍からの締め出し、「オバマケア」撤廃の試み、イエルサレムのイスラエル首都認定、イランとの核合意の撤回、北朝鮮との関係激化からの米朝首脳会談、そして「ロシアゲート」など、内政においても外交においても、その政策は激しい論争的となっている。

他方でトランプの言動と政策を批判する人々は、SNSなどを通じてつながり、性差別や人種差別、移民排斥などを批判する新しい運動の波を起こした。イスラム圏からの移民禁止に対して、多くの人々が空港に集結して抗議の意とムスリムとの連帯を表明した。トランプの大統領就任式の日には、彼の大統領就任に抗議の意を表明するため、そしてトランプに象徴されるアメリカ社会の性差別を批判するために、全米で数十万の女性たちがデモ行進を展開し、2018年1月には再び大規模なデモを挙行了。2017年秋には、大物映画プロデューサーの性的暴行への告発を契機として#metoo運動が勃興した。さらに2017年の地方選挙では非白人や女性、LGBTの候補たちが多数当選し、新たな政治的な流れを生み出しつつあると指摘する論者も少なくない。

大統領選におけるトランプの勝利とクリントンの敗北、そしてトランプ大統領の時代は、果たして何を意味しているのか。メディアにおける多くの論評は現在におけるトランプの支持層の分析や個々の政策の解説に集中しているが、トランプ大統領誕生とトランプ政権の政策の意味を十全に理解するためには、歴史的な視座が不可欠である。トランプの勝利は、アメリカの社会構造の変容や、人種・エスニシティ・ジェンダー・セクシュアリティ・階級のあり方をめぐる制度や政治文化の歴史の変容と、どのような関係にあるのであろうか。これらの問いを、

この数十年、または 1960 年代以降の半世紀、あるいはより長期的な視座から、再検討する必要がある。本シンポジウムは、アメリカ史を専門とする学会として、この課題に取り組むべき責任を負うためのものである。

報告： 徳永悠（京都大学）「アメリカが選ぶ移民、移民が選ぶアメリカ  
——1920 年代のロサンゼルス移民社会から考える排外主義」

南川文理（立命館大学）「『今や、われらはみな（反）多文化主義者である』  
——1990 年代初期の白人リベラルと『トランプの時代』」

箕輪理美（東京福祉大学）「『トランプの時代』と #MeToo 運動  
——性暴力の定義の歴史的変遷を考える」

コメント：青野利彦（一橋大学）

司会： 兼子歩（明治大学）

**総会（香雪館 401 号教室） 17:10～18:10**

**懇親会（桜楓 2 号館） 18:30～20:30**

**大会第 2 日 9 月 23 日（日）**

**自由論題（香雪館 404 号教室） 9:00～12:25（各報告 25 分、質疑 10 分）**

司会：藤永康政（日本女子大学）

報告：

塚田浩幸（東京外国語大学・院）9:00～9:35

「ポカホンタス神話のヨーロッパ起源」

吉田晋也（一橋大学・院）9:45～10:20

「20 世紀初期における中国系移民の日本認識」

奥田俊介（京都大学・院）10:30～11:05

「1960 年代のアフリカを巡る西側同盟国内政策決定過程——米英の対話を中心に」

深松亮太（神奈川工科大学・講）11:15～11:50

「『黒人支配』の詭弁と人種間の政治的平等の模索——ノースカロライナ州における  
反黒人キャンペーンの展開と黒人指導者による対抗言説」

武井寛（岐阜聖徳学園大学）12:00～12:35

「キャサリン・バウワー・ウースターの人種観と住宅政策  
——『ハウサー』と公正な住宅を求める黒人の活動との接点」

**昼休み 12:35～13:30**

**シンポジウム B（香雪館 404 号教室）13:30～16:30**

「『ヘイトの時代』に考える移民・難民保護のポリティクス」

**【趣旨】**

アメリカ合衆国(以下、アメリカ)は、建国以来、「抑圧されし者の避難所」として多くの移民を受け入れてきた。多からなる一 (e pluris unum) というモットーや、移民国家アメリカ (a nation of immigrants) という自画像は、現在でもアメリカ人のアイデンティティの核心に位置するものである。ジョン・F・ケネディやバラク・オバマ前大統領などの指導者は、時々の状況に則して、数多の移民を受け入れることでもたらされた多様性こそが、アメリカという国家の発展に寄与したことを人々に訴えてきた。

しかし、21世紀を迎えると、9.11同時多発テロを皮切りにその自画像に大きな揺らぎが見え始めた。特に、2017年1月にドナルド・トランプが大統領に就任すると、その傾向は顕著なものとなっている。バラク・オバマ前大統領が立ち上げた DACA の撤廃、メキシコ政府に対する米墨国境間の障壁建設費用の要求、中東やアフリカからのイスラム教徒の入国禁止令、そして難民受け入れ枠の縮小の試みは日本の言論空間でも大きな注目を集めていた。ここで注目すべきは、移民・難民の排斥を強化する動向が日増しに目立つ中で、マイノリティの立場に立ち、声を上げる者が少なからず存在するという事実である。「不法移民」を多く擁するサンフランシスコ、ニューヨーク、ボストンなどの聖域都市がトランプ大統領と対決する姿勢を明確に示したことは、その一例であった。移民・難民の保護をどのように捉えるかという問題は、我々がヘイトの時代の暴力に抵抗する上で喫緊の課題となっている。

以上の背景をもとに、本シンポジウムは、移民と難民の保護をめぐる、アメリカでは地方自治体・州・連邦レベルにおいてどのような議論が繰り広げられてきたのか、排斥に異議を唱えた保護論者の主張と実践は時代や地域によってどのように変化してきたのかを歴史的な観点から検討することを目的とする。

アメリカで展開されてきた移民・難民保護のポリティクスとその歴史を考察することは、移民・難民の排斥が世界的な潮流になりつつある現在の状況に対し、マイノリティに対する向き合い方、受け入れ側の現実的思惑、国家と地方行政の在り方などの側面において重要な示唆を提供するだろう。

報告： 小田悠生 (中央大学) 「イミグレーション・フェデラリズムと  
イミグレーション・ローカリズムの過去と現在」  
佐原彩子 (大月市立大月短期大学) 「共感による難民受け入れの限界  
——国際救済委員会 (IRC) の活動を中心に」  
下斗米秀之 (敬愛大学) 「企業経営者からみるアメリカ移民政策史」  
コメント：村田勝幸 (北海道大学)  
司会： 一政 (野村) 史織

### シンポジウムC (香雪館 405号教室) 13:30~16:30

「(仮) 隠れた記憶と密かな語り：ローカルな歴史をめぐって」

#### 【趣旨】

記憶、そして記念碑など記憶をめぐる表象が歴史学の重要なテーマになって久しく、過去がいかに関与され、見せられ、保存されるのか、記憶の政治学についてすぐれた研究がなされてきた。そうした「メモリー・ブーム」を踏まえた上で、記憶をめぐる研究の課題や可能性をあらためて検討することがこのシンポジウムの課題である。

記憶の歴史学では、公的な記憶の形成、すなわちしばしばナショナリズムと結びついて過去を輝かしいものとして再現する装置や、それへの権力の関与が問われてきた。同時に近年では、それらと対照的な負の歴史をめぐる記憶に対する関心がふたたび高まっている。ドナルド・トランプの大統領当選をきっかけに、企業資本主義とグローバリズムの進展の陰で取り残されてきたラスト・ベルトとそこに暮らす白人労働者階級に注目が集まり、彼ら・彼女たちの生をアメリカ史のなかに位置づけ直す動きはその一例と言えよう。

本シンポジウムは、そうした「暗い」記憶について、場所との結びつきに着目して論じることを試みる。というのも、人々が生きる場所において様々な関係が生まれ、変化していくダイナミズムこそが、記憶を作り出すものだからである。本シンポジウムの関心は、ネイションとして共有されるべきものと位置づけられる公的記憶の創出や顕彰にはない。ローカルなできごとをめぐる、あるいはローカルなコミュニティのなかで、傷や痛みを伴いながら密やかに受けつがれ、もしくは隠され、見えなくされてきた過去に焦点を当てる。

報告者は宮田伊知郎、牧田義也、加藤恵理、川口悠子の四氏である。太平洋をはさんだ日米の様々な場所、時代にまたがる報告の後、ラウンドテーブル形式のディスカッションをおこない、参加者も含めた対話を通じて、四報告でそれぞれに異なる事例や研究手法を検討する。また、記憶をめぐるポリティクスの中に歴史学自体も含まれるのであれば、記憶を形成したり脱構築したりするプロセスの一部として、歴史研究が現実の編成にどのような役割を果たしているのかを考えることも重要である。それは「メモリー・ブーム」の後も、さらには「ダーク・ツーリズム」のような記憶と場所の消費が行われているなかで、アメリカ史のみならず歴史学にとって重要な課題であり続けているはずである。

過去を再訪するなかで、負の歴史が不可視化され、あるいは再編され、顕在化してゆく、そのような変遷をつぶさに見る中で、忘却との狭間に漂う記憶を見出し、接近し、伝える可能性を考えたい。

- 報告： 加藤恵理（東洋学園大学）「ハワイにおける地元住民のハンティングの記憶  
——ローカルのアイデンティティの形成を支える語り」  
川口悠子（法政大学）「米国を見る、「平和都市ヒロシマ」を見せる  
——原爆被害の歴史化と経済復興政策」  
牧田義也（立命館大学）「歴史・記憶・記録  
——歴史学と路上のアクチュアリティ」  
宮田伊知郎（埼玉大学）「花と樹木の記憶と場所——現代アトランタにおける  
都市開発と自然保護の両立についての一考察」

司会： 丸山雄生（東海大学）